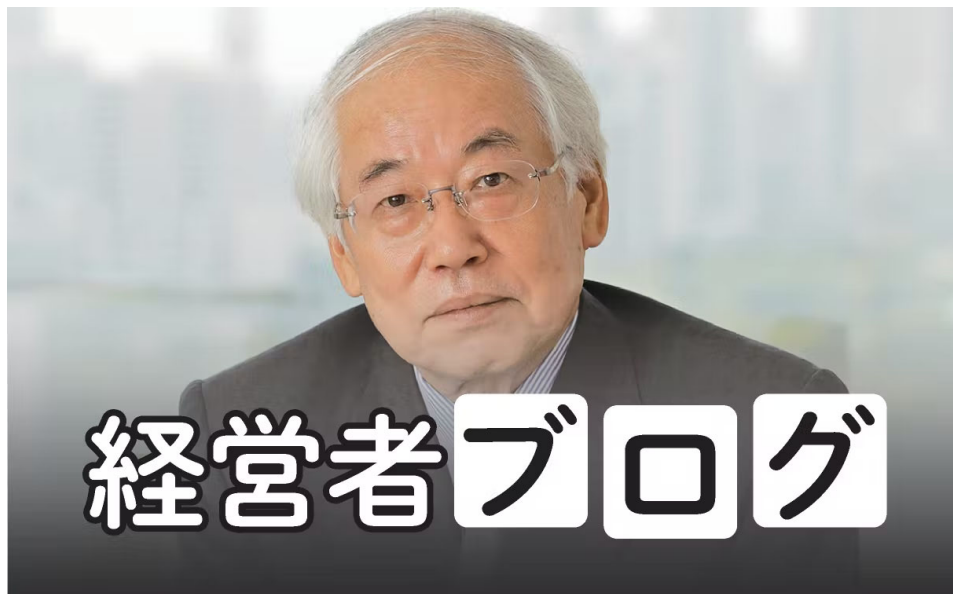


長寿に甘えて、時間を浪費するばかり

経営者ブログ 鈴木幸一 IIJ会長

2021/12/28 2:00 | 日本経済新聞 電子版



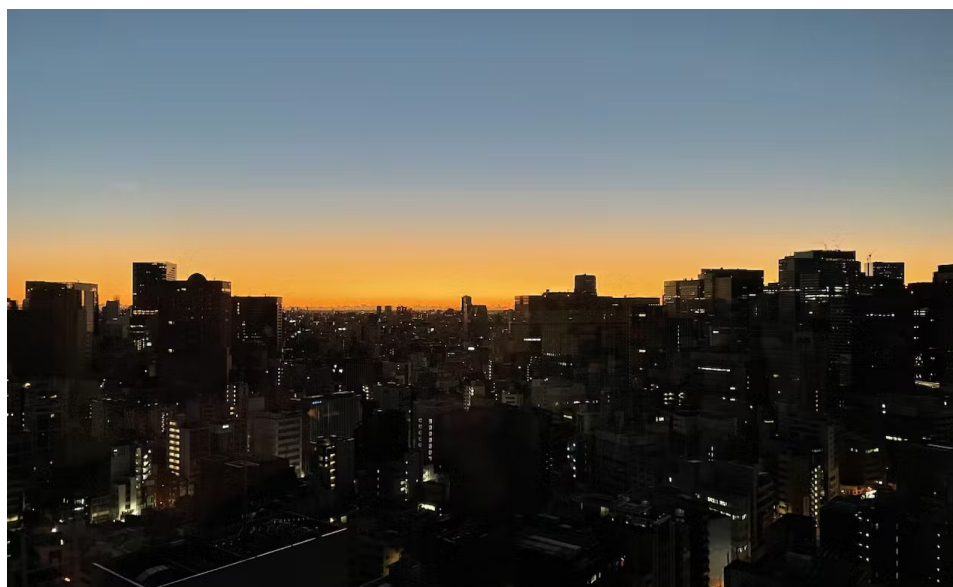
きょうは12月28日、2021年も、4日を残すばかりである。当たり前の話だが、すぐにまた年齢を重ねる。1歳児にとっての1年は、1分の1。20歳にとっての1年は、20分の1。70歳にとっては、1年の長さが70分の1。そもそもが怪しい発想なのだが、そう考えると、物理的な時間の長さは同じでも、年を経るに従って、1年を短く感じるようになるのは当たり前である。

■芭蕉の句を思い出す

理屈にならない時間感覚の話なのだが、時間に対する私の理解である。愚にもつかない話なのだが、暮れも押し迫ると、いつも同じような屁理屈（へりくつ）を思い出して、勝手に納得しているのだ。そんなことを思いながら、コーヒーを飲んでいたら、松尾芭蕉の有名な句を思い出した。

旅人と我が名よばれん初しぐれ

芭蕉、44歳の時の句である。あらためて自らの年齢を数えてみると、芭蕉の時代とは年齢の重ね方が異なるとはいえ、精神はいまだに幼稚なままにとどまっている自らにがくぜんとするより先に、あきれるほかない。芭蕉のような大天才と比べようなどと思うこともないのだが、当時は普通の人びとも、生と死という意味で、その時間感覚は鋭く、成熟も早かったのだろう。



長寿というのも、それはそれで素晴らしいことなのだが、寿命が長く延び続けるという前提に寄りかかって、昔なら1、2年で習得したことを4、5年かけるようになってきたのかもしれない。長寿に寄りかかって、いたずらに日々を過ごしてきただけのことではないかと、考え込んでしまう。

子供の頃から、翌日で間に合うことは何事も先延ばし、つまり怠惰が癖になってしまっている人間には、寿命という生命の切迫感をどこかに置き忘れたまま、時間をやり過ごしてしまうようだ。

■ 社会制度も長寿に合わせて変化

寿命が延びるに従って、さまざまな社会制度も、凝縮した時間を過ごす形から、できるだけ時間をかけて人生を送る仕組みになってきている。「下天のうちをくらぶれば、人生わずか50年」という感覚は、すっかり過去のものとなっている。定年は60歳、以後、65歳までなんらかの形で働き続けることができるようになり、いずれ70歳、75歳定年制が当たり前の話になっていくのだろう。



インギク

一方、生きている時間の感覚は、寿命が延びるごとに緊張感を失い、希薄になってくるのではないかと。年の暮れは毎年、似ているようで少しずつ違った思いが湧いてくるのだが、年齢を重ねると、頭は明晰（めいせき）さを欠き、漠然としていくばかりである。

21年は20年に続き、新型コロナウイルスによるパンデミック（世界的流行）に振り回されていた年だった。年末にかけて英国やフランスでは、新たな変異型「オミクロン型」の影響で、日々、新型コロナの感染者数が急増している。感染者数があまりに多くなり、このままでは公共部門に至るまで、あらゆる部門で労働力が不足するようになってしまうと、濃厚接触者の隔離期間を短縮するといった話がニュースとなっていた。

感染者数の推移を見る限り、日本は英仏に比較すると感染者数が圧倒的に少ない。改めて日本人は国の規制や呼びかけに対し、極めて忠実に対応する国民性だからこそ、世界でもまれなほど少ない感染者数になっているのではないかと思うのだが、素人の思い付きで、その実態はよくわからない。

■ 日本やイタリアではマスクが一般的に

マスクなしで済ます人はほとんどいない。ワクチンの接種もスタートこそ遅れ気味だったのだが、日本は欧米のように自らの信念を貫き、国の方針に反して接種を拒否する人の数は圧倒的に少ない。



冬枯れのアジサイ

長くイタリアに暮らす知人からメールがあった。欧州では当初、新型コロナによる被害ではイタリアがもっとも大きかった。ところが、最近まで英独仏に比べて被害が収まっていた。ほとんどの人が素直にマスクをつけ、ワクチンの接種にも積極的で、3回目の接種を受けた人の比率が圧倒的に増えている。ただし、ここ数日、イタリアでも感染者数は大きく増加はしているのだが。

「日本では隔離施設がいっぱいで、イタリアから一時帰国した知り合いも、税務大学校や警察大学校の寮に6泊させられました。ホテルと違ってWi-Fi（無線LAN）がないので、ルーターを渡されるようです。確かに自費での隔離をさせられる国もあるので、文句は言えないのかもしれませんが、オミクロン型の濃厚接触者となってしまったあかつきには、14日間の施設行きとなり、つらい過ごし方を強制される」

「アメリカに留学している知り合いの息子さんは、年末に2週間だけ親子で過ごせればと日本に帰国したのですが、オミクロン型の濃厚接触者となり、14日間某ホテルで過ごして羽田（空港）へ戻され、そのまま米国へ戻ったそうです。日本ではいまだ3回目のワクチン接種が進んでいないようですが、イタリアに居る私は、6月には3回目のワクチンを接種しました。日本はこれからオミクロン型の感染拡大との闘いとなるのでしょうか」

毎年のようにミラノで一緒に食事をしていた友人とも、ここ2年以上お目にかかっていない。「東京・春・音楽祭」を始めようとしていた時代だから、20年ほど前から夏になると、欧州の様々な音楽祭に顔を出しては、著名な演奏家や音楽関係者との交遊を広めていた頃である。特に、イタリアはご支援をいただいている大指揮者であるムーティさんの住まいがあるラヴェンナを訪ねることになっていて、ラヴェンナに行く前に、ミラノではメールを送ってくれた友人に案内をされて、食事をするのが恒例だった。

だが、ここ2年以上、すべてが中止となっている。諸般の状況を考えると今、あえて海外に行くことについては、ちゅうちょするばかりである。世界中の人びとと同じように、22年こそはパンデミックの収束を祈るばかりである。

くれぐれも、よい年をお迎えください。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.